

# サファヴィー朝の 「統治の都」における王宮地区建設事業 ——カズウィーンのスアードトアーバードを事例として——

後 藤 裕加子

## はじめに

近世イスラーム統一王朝のひとつであるサファヴィー朝は、王朝成立時の首都タブリーズからより内陸のカズウィーン、イスファハーンへと首都を遷したことで知られる。第5代シャー・アッバース1世（統治：1587～1629年）のイスファハーンへの遷都が、同シャーの時代に著された年代記の記述に基づいて通常1597年とされるのに対して、第2代シャー・タフマースプ1世（統治：1524～1576年）時代のカズウィーンへの遷都年代についての統一見解はなく、研究者によって提示される年代は異なる。この理由として、カズウィーン遷都に関わる叙述史料の情報が断片的で、「遷都」そのものについて記述した年代記がいずれも「遷都」から30年以上経過してから書かれ、同時代史料としての正確性に欠けるということが挙げられる。そもそも遊牧民の血統と伝統を受け継ぐサファヴィー朝の支配者には冬営・夏営という季節移動の習慣があり、首都はひとつに固定されるものという観念は薄かった。現代的な観点からカズウィーンへの遷都年を特定することは、本質的にあまり意義がない議論といえる。

筆者はかつてサファヴィー朝年代記にあらわれる「統治の都（*dār al-saltana*）」の称号について考察し、サファヴィー朝では後半期にいたるまで首都機能をもつ複数の「統治の都」が同時に存在し、シャーがその間を移動したことを論考した<sup>1)</sup>。これらの「統治の都」の多くに共通して見ら

れた施設が、内部に宮殿をもつ庭園とこれに接して設けられた広場で、広場と庭園が一体となって王宮地区を形成した。タフマースプ1世がカズウィーンに建設したサアードトアーバードの王宮地区は、サファヴィー朝の支配者が一から建設した最初の事例であり、後世の「統治の都」の王宮地区のモデルとなった<sup>2)</sup>。タフマースプ1世に特有の行動パターンとして、「遷都」以後はほとんど移動せず、カズウィーンに定住したことがあるが、以上のような点を踏まえると、カズウィーン「遷都」の過程でサファヴィー朝の支配者の「首都」の捉え方に変化が生じつつあったことは明らかである。

王宮地区における庭園と広場の結びつきについて、羽田は遊牧民君主の建設する「新都市」における庭園の優位を説いた〔羽田1987；羽田1990〕。サファヴィー朝時代のカズウィーンの王宮地区の構造を再現したSzuppeは、広場はサファヴィー朝以前にはみられなかった新要素と捉え、軍事機能が郊外から都市内部の広場に移管されたことを遊牧的な伝統の放棄と考えた〔Szuppe 1996, 171〕。しかし、両者ともに庭園と広場が複合施設を形成するようになった契機についての考察はない。庭園のなかに建てられた宮殿と広場が隣接する、複合構造の王宮地区の建設は、イスラーム以前の古代ペルシアにも観察される事象で、建築史の分野ではサファヴィー朝の庭園と広場の複合構造および公共空間としての広場の機能に、古代ペルシアの伝統の継承を指摘する研究も出てきている〔Aleimi 1997；Alemi, 2007；Babaie 2015〕。

筆者はカズウィーンへの遷都は段階的に行われたと考える立場に立ち、カズウィーンへの遷都に関する議論でより重要なのは何年に遷都した

1) 後藤 2014 や Goto 2016 など。

2) 第2章参照。広場と庭園の複合構造は、アク・コユンル朝時代に整備されたタブリーズの王宮地区をその先駆モデルと見なすことができる。サファヴィー朝の王宮地区の複合構造については、アッバース1世時代のイスファハーンを中心にいくつか研究があるが、タブリーズの王宮地区についてはその一環で言及されるに留まる (Babaie 2003 や羽田 1990 など)。タブリーズの王宮地区についてはまた別稿を準備している。

かではなく、カズウィーンに「統治の都」としての機能が整備されていた過程と、その具体的な機能を明らかにすることであると考える。そのため本稿では、まずカズウィーンの変都年に関する根拠となっている年代記史料などの記述を、諸説を紹介しながら整理する<sup>3)</sup>。史料のなかでも特に独自情報を提供するのにはタフマースプ1世の治世時代に執筆された年代記 *Takmilat al-akhbār* (『歴史補遺』, 978/1571年執筆完了) とその作者 ‘Abdi Beg Shīrāzī (1580-1年没) による詩集、また後世の年代記であるが、カズウィーン「遷都」に関わる記述が最も詳しい Qāzī Aḥmad Qumī 著 *Khulāṣat al-tawārīkh* (『歴史の精髓』, 999/1591年に執筆終了) である<sup>4)</sup>。そして王宮地区の建設の過程を、「遷都」に関わる記述、タフマースプ1世の季節移動パターン、「統治の都」の称号の使用の観点から検討し、最後に「統治の都」の機能に関わる施設整備について考察する。その上で、サファヴィー朝にとっての「統治の都」の役割について考えていく。

## 1. カズウィーン遷都に関わる主な出来事と諸説

タフマースプが「遷都」後に定住したのはカズウィーンに彼が整備した王宮地区で、その王宮地区ではサアータトアーバードと呼ばれる庭園 (*Bāgh-i Sa‘ādat-ābād*) の内部にダウラトハーナ (*daulat-khāna*) が建てられていた<sup>5)</sup>。カズウィーン遷都に関わる出来事は、主にこの王宮地区の施

- 3) 本稿の主旨から外れるため、ここでは諸説とその根拠についての詳細な検討は行わない。詳しくは平野 1997 (および第3章) を参照のこと。
- 4) *Khulāṣat* はサファヴィー朝初期の年代記の他に、カズウィーンに関する独自情報を含む *Takmilat* と *Jawāhir* も情報源として利用している [Glassen, 13; Eshraqi, 89; *Khulāṣat*, 3; Quinn, 19]。ただし、「遷都」に関して複数の史料に共通して記載されている出来事は少なく、内容が一致しないことも多い。
- 5) ペルシア語で直訳すると政府の家。サファヴィー朝では基本的に王族の住居となる建物を意味する。カズウィーン庭園とダウラトハーナは現存しない (第6章参照)。Szuppe 1996 は、現存施設と年代記や詩などのペルシア語史料、そして外国人旅行者の記述によって、サファヴィー朝時代のカズウィーン王宮地区の全体構造を再構成した。Alemi 2007 は庭園の内部構造を、特に通り ↗

サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業

表 タフマースプ1世の冬営地とカズウィーンの王宮地区建設事業に関わる諸事項

統治年	年	事件	夏営	冬営
0:	930/1524			Tabriz
1:	酉年/931/1525		Suhand/Ujan	Tabriz
2:	戌年/932/1526	キジルバシユ反乱		Qazwin
3:	亥年/933/1527	ホラーサーン遠征	(Khurāsān), Gūzl-durr	Qazwin
4:	子年/934/1528	ホラーサーン遠征	Kharrīqān	Qum
5:	丑年/935/1529	バグダード遠征	? → Baghdad	Qazwin
6:	寅年/936/1530	ホラーサーン遠征	Khurāsān → Yazd →	Isfahān, Gandmān
7:	卯年/937/1531		Gandmān (daulat-khāna = tent)	Tabriz
8:	辰年/938/1532	クルディスタン遠征	(Kurdīstān)	Tabriz
9:	巳年/939/1533	ホラーサーン遠征	(Khurāsān)	Herāt
10:	午年/940/1534	スレイマン遠征1	Qazwin → Van	Van → Tabriz
11:	未年/941/1535		Tabriz → Irāq-i 'Ajām → Ujān → Ardabil	Tabriz
12:	申年/942/1536		Ujān → Ardabil → Irāq → Qazwin → Khuāsān	Khurāsān
13:	酉年/943/1537		→ Ray → Qazwin → Tabriz	Tabriz (944 Sha'bān/1538.1-)
14:	戌年/944-5/1538	シールワーン遠征	(Shīrwān)	Tabriz
15:	亥年/945-6/1539			Tabriz
16:	子年/946-7/1540	グルジア遠征	Sūrluq → (Georgia)	Tabriz
17:	丑年/947-8/1541		Ujan/Suhand	Tabriz
18:	寅年/948-9/1542	フーゼスターン遠征	? → Khtzistān	Qum
19:	卯年/949-950/1543		(Sare-band) → Hamadān	DS Qazwin
20:	辰年/950-1/1544		Abhar or Sūrluq	DS Qazwin
21:	巳年/951-2/1545		Sultāniya → Dīmghān	Qazwin
22:	午年/953/1546	アルカース反乱	Ray, Kharrīqān (daulat-khāna) → DS Tabriz (→ Erivan)	
23:	未年/954/1547	対アルカース遠征	Shamāhī → Tabriz	Tabriz
24:	申年/955/1548	スレイマン遠征2	? → Erjinjan → Tabriz → Qazwin	Qazwin
25:	酉年/956/1549		Hamadān	Qazwin
26:	戌年/957-8/1550		Sultāniya → Āzirbā'ījān	Qarā Bāgh (Arrān)
27:	亥年/958-9/1551	グルジア遠征		Qarā Āghāj (Arrān)
28:	子年/959-960/1552	グルジア遠征		Urūmiya
29:	丑年/960-1/1553			Nakhchiwān
30:	寅年/961-2/1554	スレイマン遠征3		Qarā Bāgh
31:	卯年/962-3/1555		DS Tabriz	DS Qazwin
32:	辰年/963-4/1556		(Daryāwuk)	
33:	巳年/964-5/1557		Suhand → Tabriz	Qazwin → Tabriz
34:	午年/965-6/1558		Khallikān	Qazwin
35:	未年/966-7/1559	バヤズィト亡命	季節移動なし	Qazwin
36:	申年/967-8/1560		Qazwin	
37:	酉年/968-9/1561		Tarum	Qazwin
38:	戌年/969-70/1562		Qazwin	
39:	亥年/970-1/1563			Qazwin
40:	子年/971-2/1564			
41:	丑年/972-3/1565	対ウズベク戦		
42:	寅年/973-4/1566			
43:	卯年/974-5/1567			
44:	辰年/975-6/1568			
45:	巳年/976-7/1569			
46:	午年/977-8/1570			Qazwin
47:	未年/978-9/1571			
48:	申年/979-980/1572			
49:	酉年/980-1/1573			
50:	戌年/981-2/1574			
51:	子年/982-3/1575			
52:	丑年/983-4/1576			

↘ (khiyābān) に注目して明らかにした。Wirth 1997 はサファヴィー朝時代以降の市街地の変遷を考察している。

サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業

「統治の都」に関する出来事	出典
	<i>Takmilat</i> , 60; <i>Aḥsan</i> , 1138
	<i>Takmilat</i> , 61; <i>Aḥsan</i> , 1143; <i>Khuḷāṣat</i> , 157
	<i>Takmilat</i> , 62; <i>Jawāhir</i> , 152; <i>Aḥsan</i> , 1153
	<i>Takmilat</i> , 64; <i>Jawāhir</i> , 153; <i>Aḥsan</i> , 1162; <i>Khuḷāṣat</i> , 169
	<i>Takmilat</i> , 64-5; <i>Jawāhir</i> , 156; <i>Aḥsan</i> , 1168
	<i>Takmilat</i> , 65; <i>Jawāhir</i> , 159; <i>Aḥsan</i> , 1184; <i>Khuḷāṣat</i> , 178
	<i>Takmilat</i> , 66; <i>Aḥsan</i> , 1198; <i>Khuḷāṣat</i> , 213
	<i>Takmilat</i> , 67; <i>Jawāhir</i> , 161; <i>Aḥsan</i> , 1203
	<i>Takmilat</i> , 73; <i>Aḥsan</i> , 1205
	<i>Takmilat</i> , 74
	<i>Takmilat</i> , 79; <i>Aḥsan</i> , 1217, 1220
	<i>Takmilat</i> , 84-5; <i>Jawāhir</i> , 181; <i>Aḥsan</i> , 1235, 1244; <i>Khuḷāṣat</i> , 254
	<i>Takmilat</i> , 85; <i>Khuḷāṣat</i> , 254
	<i>Takmilat</i> , 88; <i>Jawāhir</i> , 184-5
タブリーズのŞahib-abad広場での公開処刑	<i>Takmilat</i> , 90; <i>Aḥsan</i> , 1265
	<i>Takmilat</i> , 91
タブリーズの新宮殿建設	<i>Takmilat</i> , 91; <i>Aḥsan</i> , 1273; <i>Membre</i> , 29
	<i>Takmilat</i> , 91; <i>Aḥsan</i> , 1277; <i>Khuḷāṣat</i> , 295
	<i>Takmilat</i> , 92; <i>Jawāhir</i> , 192; <i>Aḥsan</i> , 1280
	<i>Takmilat</i> , 92-3; <i>Jawāhir</i> , 192; <i>Aḥsan</i> , 1285, 1288
dar al-salṭana称号の初使用	
フマーユーン仁命・庭園の建設とダウラトハーナの設計	<i>Takmilat</i> , 94; <i>Jawāhir</i> , 194; <i>Aḥsan</i> , 1295; <i>Khuḷāṣat</i> , 307, 312; <i>TAA</i> , 98-99
Muḥammad KhānをSa'adat-abad庭園で会見	<i>Takmilat</i> , 95; <i>Jawāhir</i> , 196; <i>Aḥsan</i> , 1296; <i>Khuḷāṣat</i> , 313
	<i>Takmilat</i> , 96; <i>Jawāhir</i> , 196, 199; ( <i>Aḥsan</i> 1300); <i>Khuḷāṣat</i> , 315)
	<i>Takmilat</i> , 96,97; <i>Jawāhir</i> , 200; ( <i>Aḥsan</i> , 1309; <i>Khuḷāṣat</i> , 323)
Sa'adat-abad庭園造営・修繕 (造園953年)	<i>Takmilat</i> , 101; <i>Jawāhir</i> , 203; <i>Khuḷāṣat</i> , 332
	<i>Takmilat</i> , 103; <i>Aḥsan</i> , 1333; <i>Khuḷāṣat</i> , 337
	<i>Takmilat</i> , 104; <i>Jawāhir</i> , 207; <i>Aḥsan</i> , 1337; <i>Khuḷāṣat</i> , 343
	<i>Takmilat</i> , 104
	<i>Takmilat</i> , 106
	<i>Takmilat</i> , 106; <i>Jawāhir</i> , 209
	<i>Takmilat</i> , 108
カズウィーンを統治の都に (新ダウラトハーナ建設中)	<i>Takmilat</i> , 109; <i>Jawāhir</i> , 211; <i>Khuḷāṣat</i> , 375-6, 378-9, 383; ( <i>TAA</i> , 95-6)
	( <i>Takmilat</i> , 110; <i>Aḥsan</i> , 1395)
	<i>Takmilat</i> , 111-2; <i>Aḥsan</i> , 1399, 1400, 1401; <i>Khuḷāṣat</i> , 387
サアードターバード庭園内部の建物の完成・新ダウラトハーナへの引継	<i>Takmilat</i> , 113; <i>Aḥsan</i> , 1407; <i>Khuḷāṣat</i> , 393, 399
新広場 (または庭園) でのバヤズィト会見・旧ダウラトハーナを迎賓館に	<i>Takmilat</i> , 114, 116; <i>Khuḷāṣat</i> , 401, 406-7; ( <i>Aḥsan</i> , 1415; <i>Jawāhir</i> , 217; <i>Bidllst</i> , 214)
	<i>Khuḷāṣat</i> , 407; ( <i>Takmilat</i> , 117)
オスマン朝使者の謁見	<i>Khuḷāṣat</i> , 417-8; <i>Takmilat</i> , 119; ( <i>Aḥsan</i> , 1420-1)
	<i>Takmilat</i> , 120; <i>Aḥsan</i> , 1420, 1425, 1429; <i>Khuḷāṣat</i> , 432
例年通りのカズウィーン冬営・チェヘル・ソトウーン宮殿で使節謁見	<i>Takmilat</i> , 120; <i>Aḥsan</i> , 1430; <i>Khuḷāṣat</i> , 437
	( <i>Takmilat</i> , 121-)
	( <i>Takmilat</i> , 122-)
	( <i>Takmilat</i> , 127-)
長男の結婚・Arthur Edwards謁見	( <i>Takmilat</i> , 128-; <i>Khuḷāṣat</i> , 456)
オスマン朝の使者の出迎え (広場のバーザール装飾)	( <i>Takmilat</i> , 130-; <i>Khuḷāṣat</i> , 462)
	( <i>Takmilat</i> , 131-; <i>Khuḷāṣat</i> , 558)
夏営・冬営兼ともカズウィーン (例年通り)	<i>Takmilat</i> , 132; ( <i>Khuḷāṣat</i> , 563)
	( <i>Khuḷāṣat</i> , 566)
	( <i>Khuḷāṣat</i> , 570)
	( <i>Khuḷāṣat</i> , 572)
通常通りにカズウィーンで国事に従事	( <i>Khuḷāṣat</i> , 581, 582)
	( <i>Khuḷāṣat</i> , 587)

- ・トルコ暦優先の編年形式で、ヒジュラ暦との対応も正確な *Takmilat* を基準に作成
- ・冬営地はトルコ暦での年末のものを記載
- ・ヒジュラ暦で冬が2年にまたがった場合は、2年分の年号を記載
- ・西暦はノウルーズのときの年号を記載

設整備にまつわるもので、これらの一連の出来事のどれを転換点ととらえるかによって、カズウィーン遷都年に多様性が生じることになった。

- ① 950/1543 年：カズウィーン冬営、「統治の都」の称号の初使用
- ② 951/1544 年：庭園とダウラトハーナの設計開始
- ③ 955/1548 年：庭園整備と建物の造営，Chardin の記述
- ④ 962/1555 年：アマスィヤ条約締結，*Khulāṣat* の記述
- ⑤ 966/1558 年：新ダウラトハーナの竣工

タブリーズからカズウィーンへの遷都の最大の転換点と見なされるのは、オスマン朝の第10代スルタン・スレイマンの第3回目のアゼルバイジャン遠征の1年後に締結されたアマスィヤ条約である<sup>6)</sup>。アッバース1世時代初期に完成した年代記 *Khulāṣat* にある、「(オスマン朝との和平締結の後に) カズウィーンの地を「統治の都」とした」 [*Khulāṣat*, 378-9] という記述に基づいて、多くの研究者が同条約の締結年④962/1555 年をカズウィーン遷都の年と考えてきた<sup>7)</sup>。イラン北西部のサファヴィー朝とオスマン朝の国境争いの前線から近いタブリーズから内陸に位置するカズウィーンへの遷都には、何よりも安全保障上の要因が指摘され、実際にアマスィヤ条約締結後しばらくは、両王朝間の国境争いは沈静化する。

962/1555 年遷都以外の説は、カズウィーンの王宮地区の建設活動を遷都の指標とする。主なものでは、ダウラトハーナが内部に建つサアーダトアーバード庭園の造園が開始された③955/1548 年を遷都年とみなすのが Lockhart や Roemer らである<sup>8)</sup>。カズウィーン遷都に関する専論である Eshraqi 1996 は、951/1544 年に準備が着手されたとしつつ、新たなダウラ

---

6) スレイマンは、1534-5 年、1548-9 年、1553-4 年の計3回のアゼルバイジャン遠征を行っている。

7) 962/1555 年遷都説を採用する主な研究は発表順に以下の通りである。Röhrborn 1966, 7; Braun, 1969, 190; Savory 1980, 63; Morgan 1988, 128; Lambton 1990, 860; Morton (Membré) 1999, xxiv; Babaie 2003, 41; Babaie 2008, 47; Newman 2006, 32; Alemi 2007, 114.

8) Lockhart 1960, 69; Sutūda 1969, 174; Roemer 1986, 249.

トハーナの建設が完了し、タフマースプ1世が旧ダウラトハーナから新ダウラトハーナに移った⑤965/1557年を遷都の年とする<sup>9)</sup>。

Mazzaoui 1975 は明確な遷都年を定めず、段階的に遷都が行われたことを考察した。数年ぶりにカズウィーンでの冬営が行われた①950/1543年に遷都が行われたものの、実際的に遷都が実現したのは⑤966/1558年と考える [Mazzaoui 1975, 518]<sup>10)</sup>。Gronke 1992 および Szuppe 1996 もタブリーズ、カズウィーン、および第3の首都イスファハーンが首都機能を共有したことを示唆、もしくは年代確定を保留している<sup>11)</sup>。カズウィーン遷都年に関わる諸説を整理した数少ない専論のひとつ平野 1997 は、②951/1544年のダウラトハーナの着工開始から3段階を経て⑤966/1558年に遷都が完了したとみなす<sup>12)</sup>。

以上のように、研究者の理解は多様であるものの、近年は遷都は段階的に行われたと考える説が主流となっている。いずれにしても①950/1543年から⑤966/1558年の間にカズウィーンに首都に相応しい王宮地区の整備が進んだことは明らかである。Gronke が指摘するように、当時のサファヴィー朝年代記に首都に関する記述が乏しいのは、当時の歴史叙述の特質というよりは年代記作家の首都への関心の欠如に原因がある。支配者はティムール朝の後継者として首都の郊外に天幕を張って過ごす習慣を保持し、その冬営地から夏営地への移動や帰還は、首都の移転よりも重要事

9) なお Eshraqi は、前の論文 Eshraqi 2536 では 951/1544 年遷都説を取っていた。

10) Mazzaoui はシャーの年ごとの冬営地と夏営地に着目し、この年以降、タフマースプ1世のカズウィーンでの冬営が増えたことを遷都の指針としている(第4章および第5章参照)。なお、これら以外に Savory は『アッバースの歴史』(TAA)の英訳本(*History of Shah 'Abbas*)で960/1552-3年まで遷都はなかったとするが、根拠は明記されていない [TAA (ed. Savory), I, 163 (note 201)]。

11) Gronke 1992; Szuppe 1996, 143. ただし、いずれもカズウィーン遷都に関する専論ではない。

12) 平野には遷都年に関する議論を整理した平野 1997 以外に、カズウィーンが新たな首都に選ばれた理由に関する考察を整理した平野 1999 がある(平野 2000 も参照)。ただ平野の一連の研究はほぼ同時期に発表された Eshraqi 1996 や Szuppe 1996 が十分に考察に取り入れられなかった。

であった。その一方タブリーズからカズウィーン、そしてイスファハーンへの首都の移動は、ティムール朝下で広がっていた環境変化や首都の重要性を示したものであったといえよう<sup>13)</sup>。

## 2. カズウィーン王宮地区の建設事業の開始

一国の首都にはそれに相応しい施設が必要となるが、サファヴィー朝の場合には、それは庭園と広場に集約される。サファヴィー朝でよく知られ、かつ研究が進んでいるのが、アッバース1世がイスファハーンに遷都した際に行った新市街の整備で、ナグシェ・ジャハーン広場 (*Maidān-i Naqsh-i Jahān*) を囲むように王宮地区入口のアリ・カブ門 (西辺)、王のモスク (南辺)、シャイフ・ルトフォッラー・モスク (東辺)、大バーザール (*Qaiṣārīya*) の入口 (北辺) が配置された<sup>14)</sup>。広場はサファヴィー朝では政治活動や経済活動が営まれる重要な公共空間として機能する。アッバースはイスファハーンにならった王宮地区を各地に建設するが<sup>15)</sup>、カズウィーンはこの広場=宮殿モデル (*maidān-palace model*) の先駆と考えられている<sup>16)</sup>。カズウィーン王宮地区ではダウラトハーナが建つサアードトアーバード庭園は馬の広場 (*Maidān-i Asb*) に面している<sup>17)</sup>。

カズウィーン王宮地区建設の発端は、951/1544年、もともとあった

13) Gronke 1992, 20 を参照。

14) 日本の研究としては羽田の一連の研究 (羽田 1987 や羽田 1996 など) があり、海外のものとしては本稿で参考に行っている Alemi 1997, Babaie 2008, Blake 2003 を挙げておく。

15) Wilber 1962, 56; Babaie 2015, 178; Alemi 1997 など参照。広場の機能については本稿第6章でも論じる。

16) Babaie 2003, 41; Wirth, 1991, 471 など。これは、サファヴィー朝の最初の首都タブリーズの王宮地区が前の時代のアク・コユンル朝のものを継承したものであったのに対して、カズウィーン王宮地区の建設がタフマースブによって最初から行われたことを念頭においているのであろう。

17) 馬の広場は、王の馬の広場 (*Maidān-i Asb-i Shāhī*) もしくはサアードトアーバード広場 (*Maidān-i Sa'ādat-ābād*) と呼ばれた (Szuppe 1996, 171 および本稿第6章参照)。



市街地の北部に庭園とダウラトハーナの設計が行われたことにある。それは①950/1543年の秋に数年ぶりに、「冬営のために天国を飾る統治の都カズウィーンに到着なされた」[*Takmilat*, 93] 翌年のことであった<sup>18)</sup>。当時、同地に滞在していた‘Abdī Beg Shīrāzī は、*Takmilat* にサアダトアーバードの王宮地区の建設が、まず庭園の設計から始まったことを述べている。

②-a. 951年/1544年末「カズウィーンでの冬営とその地の庭園とダウラトハーナの設計が決まり、その後、もっともよい時に、同時代に類似なきものが完成した。小生はこの建物と庭園について『エデンの園』と賞される5つのマスナヴィーからなる5000対句の詩作を詠み、陛下の耳目にお届けした。」[*Takmilat*, 94]

*Khulāṣat* では、庭園内部の描写がより詳細となる。

②-b. 951年/1544年末「この年の冬営はカズウィーンで行った。またこの年幸運なるシャーは御心にカズウィーンに庭園の建設を抱いた。そこで同年ズー・アルヒッジャ月1日(1545年2月13日)、*Zangiyābā-darā* と呼ばれる土地を *Mīrzā Sharaf Jahān* の赦しをえて購入し、そこにエラム庭園よりも心喜ばし、フィルドゥスの果樹園よりも生気を与える庭園を建設した。神に保護された国の学芸の知識を有する技師たちを呼び寄せ、矩形の庭園を設計し、サアダトアーバード庭園と名づけた。その庭園の中心 (*dar miyān-i ān bāgh*) にはいと高き建物と至高なるターラール (*tālār-hā*)<sup>19)</sup>、イーワーン (*īwān-hā*)<sup>20)</sup>、ハウズ(貯水池)が設計された。その大門 (*darwāza*) は大

18) 以降、第1章で紹介した出来事に関わる史料には、その整理番号と同じ番号を冒頭につける。

19) 3面が外に向かって開かれ、木製の柱で支えられた平屋根を持つ一種の東屋。

20) イーワーンは、ペルシア語でアーチ状の開口部をもつ半戶外空間を意味する

変高いものにされ、そのアーチの表側は天空の頂きまで掲げられ、彩色されたタイルで飾られ、その端にはわし座にまで届く鳩の塔が建てられた。庭園の領域は幾何学模様で、矩形の通路、三角形と六角形の芝生で分け、その通りの真中に大きな水路を通した。その辺縁にはスズカケとハクヨウの木々を植え、辺の周りはバラ、ジャスミン、ハナズオウ、ニレや他の果実がなる木々で飾った。」[*Khulāṣat*, 312-3]

あらたに判明することに、*Mīrzā Sharaf Jahān* なる人物から土地が購入されたことがある。*Mīrzā Sharaf Jahān* の父 *Qāḍī Jahān al-Ḥasanī* は、タフマースブの宰相を務めた人物である<sup>21)</sup>。庭園内部の描写からは、それがサアードトアーバードという名前を持つ矩形の広大な庭園で、様々な植物が植えられたこと、庭園の中心に建物が配置され、庭園の大門には彩色タイルが用いられていたことが確認される。ただし、この記述からは同年に建設が着工されたかどうかは判然としない。984/1576-7年に執筆が完了したタフマースブ時代の年代記 *Jawāhir al-akhbār* (『歴史の宝石』) の記述では、庭園と建物の着工は953/1546-7年とされる。

③「サアードトアーバード庭園の壁は築いていたのだが、木を植えて整備し、建物を建てた。庭園の着工は953年である。庭園の宮殿の建物の建設 (*sākhtan-i 'imārat-i dargāh-i bāgh*) の年である。」[*Jawāhir*, 203]<sup>22)</sup>

---

ㄨ 建築用語で、時代によってこのような空間を持つ講堂やホールもイーワーンと呼ばれる。主にペルシア語文化圏やその影響を受けた地域のイスラーム建築にみられる。

21) 平野と *Eshraqi* は、宰相 *Qāḍī Jahān al-Ḥasanī* がカズウィーン遷都に大きな役割を果たしたと考える(平野1998, 10を参照)。なお、*Jawāhir* では登場人物名が違っており、タフマースブはやはり宰相であった *Malik Maḥmūd Dailamī* の息子 *Amīr Beg* の諸邸宅 (*khāna-hā*) をダウラトハーナにしたとする[*Jawāhir*, 121]。

22) 建設開始年の953年の部分は詩を用いた数字遊びが書かれているが省略する。

同じく *Jawāhir* によれば、951-2/1545 年にサアーダトアーバード庭園で会見が行われていることが書かれており [*Jawāhir*, 196]、庭園がその約 1 年後の 953/1546-7 年までにはある程度使用できるように整備されていたことが推察される<sup>23)</sup>。いずれにしても、サアーダトアーバード庭園は初期段階で壁によって囲まれていたものの、955/1548 年までの期間中に内部の整備と建物の建設が続けられていたためであろう。

なお、17 世紀後半にサファヴィー朝宮廷を訪れたフランス人宝石商シャルダンがカズウィーンに関する章で、「ヘジュラ暦 955 年、タハマス王 (=タフマースプ 1 世) はソリマン大帝 (=オスマン朝のスルタン・スレイマン) の攻撃からタウリスを守りきることは所詮無理と諦め、このカズビン (=カズウィーン) に撤退、町を王国の首府にしたが、……」[シャルダン, 411] と述べている。オスマン朝のスルタン・スレイマンは 1548 年に第 2 回アゼルバイジャン遠征を行っており、同年と翌年にタフマースプがカズウィーンで冬営しているのは事実である。しかし、タフマースプが 955/1548-9 年に遷都した明言するサファヴィー朝年代記はない。シャルダンの記述の根拠が *Jawāhir* なのかどうかは不明だが、955/1548 年遷都説を取る研究者はシャルダンの記述を根拠としていると考えられる。

### 3. 年代記が描く「遷都」

965-6/1558 年の新ダウラトハーナの完成をもって、カズウィーンへの「遷都」事業が完成したと解釈するならば、その間に首都の建築事業が進められていたことになり、多くの研究者が採用する 962/1555 年のカズウィーン遷都年も妥当性がないとはいえない。アッバース 1 世時代に完成し

---

23) *Takmilat* の作者‘Abdi Beg Shīrāzī の詩集 *Dauḥat al-Azhār* にはタフマースプの弟バフラム・ミールザーの庭園が登場する [*Dauḥat*, 50]。同王子は 957/1549 年に死亡したので、建築活動の開始がそれ以前に始まっていたことを示す [Cf. Szuppe 1996, 166; Eshraqi 1977, 4-5; 平野 1997, 45]。第 6 章参照。

た2つの年代記は、新ダウラトハーナの完成を待たずに「遷都」が行われたことで一致する。

④-a. 「(オスマン朝との和平も締結したので次のように決定した) 神に守られた国の中間に位置し、冬営や他の町や土地からの近さの点から他の場所に優るカズウィーンの地を統治の都とした……(住民の出会い)……吉兆なるダウラトハーナの建物をジャアファルアーバード (*Ja'far-ābād*) とバブ・アルジャンナト (*bāb al-jannat*, 天国の門) にあらたに建設したが<sup>24)</sup>、まだ完成していなかったので、同年ズー・アルヒッジャ月末(1555年末)に先に寛容の避難所たる *Qāḍī Jahān al-Ḥasanī* の邸宅の一部であった旧ダウラトハーナ (*Daulat-khāna-i kuhna*) に幸運のなか逗留された。」 [*Khulāṣat*, 378-9]

第4章で明らかにするように、この頃のタフマースブの冬営地は1カ所に固定されておらず、この年は6年ぶりのカズウィーンでの冬営となった。このときに王宮地区の建設活動がまだ未完成であったため、タフマースブが自身の宰相 *Qāḍī Jahān al-Ḥasanī* の邸宅となっていた旧ダウラトハーナに仮住まいした。

アッバース時代の年代記の代表作 *Tārīkh-i 'ālam-ārā-yi 'Abbāsī* (『世界を飾るアッバースの歴史』、以下 *TAA*) は、オスマン朝の軍事的脅威や安全保障上の問題を遷都の理由として明確に説明している<sup>25)</sup>。

24) サアードトアーバード庭園の北部に整備された王宮関係者のための地区。⑤-b 参照。サアードトアーバード庭園は別名ジャアファルアーバードとも呼ばれた。ダウラトハーナがジャアファルアーバードのダウラトハーナと呼ばれる例もみられる。これは、庭園の建設とともに、④-bにある、市の北部に整備された宮廷関係者の居住地区の名に由来するもので [cf. *Takmilat*, 116; *Khulāṣat*, 379, 399; *Dauhat*, 26, 56, 64, 66]、サアードトアーバードを含んだ広範囲の新市街を意図しているようである。なお *Eshraqi* によれば、ジャアファルアーバードは第6代イマーム・ジャアファル・アッサーディクにちなむ [*Eshraqi* 1996, 111; *Alemi* 2007, 115-6]。

25) *Mazzaoui* 1975 は、*Khulāṣat* の「冬営や他の町や土地からの近さ」という記

④-b. 「王の即位開始から 30 年、陛下は幸運のうちに国事に携わってこられたが、ヴァンガルーム（=オスマン朝）の手にわたり、統治の都タブリーズに近いため、永遠の王座と統治の地（*pāy-takht-i humāyūn wa maqar-i salṭana-i abad-maqrūn*）として統治の都カズウィーンを選ばれ、そこにダウラトハーナと至高の庭園を設計し、そこに住まわれた。3,4 年後に建物が完成し、12 年間、カズウィーンのだウラトハーナからどこにも移動しなかった。」[TAA, 95-6]

2つの年代記の最大の問題点は、両者がタフマースブの時代に著されたものでないことである。*Khulāṣat* の著者 Qāzī Aḥmad Qumī は、カズウィーン建設事業が進行中の 964/1555-7 年、当時 11 歳で家族とともにマシユハドに移住し、同地で 8 年間過ごした後で、タフマースブに仕えるようになった<sup>26)</sup>。つまり、Qāzī Aḥmad Qumī 自身がカズウィーンへの遷都の経過を体験しておらず、また年代記が書かれたのも 30 年以上経過してからである。また、TAA の著者の Iskandar Beg Munshī (1632 年頃没) は、この頃には生まれていなかった。「遷都」を実体験していない二人が執筆した年代記は、「遷都」に関しては同時代史料とはいえない。

TAA は、「遷都」が行われたと判断されうる別の要因として、タフマースブのカズウィーン定住のことを記している。しかし Gronke が指摘するように、タフマースブ時代の年代記作者の関心はシャーの冬営・夏営の季節移動にあり、タフマースブの治世内に執筆された年代記で遷都について具体的に言及したものはない。これらの年代記が記録するタフマースブの冬営地を見てみると、「遷都」の前年の冬にはタブリーズで過ごし、同地

---

ㄨ 述に注目し、カズウィーンが新商業ルート上に位置していたことを遷都の理由のひとつに挙げている。平野や Eshraqi は、遷都の理由として、オスマン朝の侵攻や内乱によるタブリーズ地方の荒廃やペストの流行という外的要因に加えて、カズウィーン地方の宗教的な重点領域化を内的要因に挙げる [Eshraqi 1996, 110; 平野 1997, 49; 平野 1998, 10]。

26) *Khulāṣat* (ed. Müller), 3-7 参照。

の庭園で次男の結婚の祝宴を催している [Jawāhir, 211]。また、2年後の冬にもタブリーズで冬営しており、タフマースブのカズウィーンでの冬営機会は増えているものの、まだ定住したとまではいえない<sup>27)</sup>。

サファヴィー朝初期の年代記はヒジュラ暦での編年形式が主流であった。タフマースブ時代の後半から太陽暦のトルコ暦を優先使用した編年形式が年代記に採用されていくようになるが、*Khulāṣat* はその初期の代表作のひとつである<sup>28)</sup>。夏営の季節の開始を意味するノウルーズ（新年）で一年が始まる年代記記述の導入は、「首都」の捉え方や歴史叙述への志向にも変化を生じさせることになったであろう。春分の日にあたるノウルーズは、タフマースブの後継者の時代には何日にもわたる祝祭がカズウィーンの宮殿で開催されるようになる。また、宮殿は新王の即位式の舞台ともなった<sup>29)</sup>。*Khulāṣat* が執筆された時代は、整備が完了した王宮地区で開催される宮廷儀礼が確立し、カズウィーンが「首都」であることが常態となった時代であり、後世から振り返って、タフマースブの定住時期を確定したものではないか<sup>30)</sup>。

984/1576-7年に完成した *Jawāhir* は、タフマースブが約30年間首都カズウィーンに定住 (*dar takht-i daulat wa salṭanat sākinand*) と明記する [Jawāhir, 146]。また、*Khulāṣat* も965/1558年の記述で、シャーが11年間カズウィーンを離れなかった [Khulāṣat, 398] としている。事実かどうかはともかく、この2つの記述から逆算すると、カズウィーン王宮地区の整備が進められた950/1540年代半ば以降にタフマースブがカズウィーン

---

27) 冬営と遷都との関係をめぐる考察については、平野 1997, 41-2 も参照。

28) 年代記におけるトルコ暦の採用は、文書におけるトルコ暦の採用と連動している。トルコ暦は東アジア由来の十二支が春分始まりのイラン暦に取り入れられたものであるが、トルコ暦の新年とノウルーズの一致が文書で確認されるのも、960/1550年代後半のことである（後藤 2008, 59 および後藤 2005 を参照）。

29) 後藤 2004 および後藤 2005 を参照。

30) 平野も962/1555年遷都説には反論を加えているが、この観点からの考察はない（平野 1997, 43-5）。

への定住志向を強めていたことはいくつかある。

新ダウラトハーナが完成し、旧ダウラトハーナからの引越が行われたことは、タフマースブ時代の年代記 *Aḥsan al-tawārīkh* (『年代記精粹』) と *Khulāṣat* が伝えている。

⑤-a. 「また、この年、信仰の保護者たるシャーは、古いダウラトハーナ (*Daulat-khāna-i kuhna*) から新しいダウラトハーナ (*Daulat-khāna-i nau*) に移られた。」 [*Aḥsan*, 1407]

⑤-b. 「この年、諸邸宅の内外、街路を含めて、サアードトアーバード庭園のいと高き建物と、吉兆なるダウラトハーナが完成した。世界のシャー、アミールたち、ワジールたち、コルチたち、側近たち、その他の王宮の従者たちは、比類なき快適な建物をカズウィーンの北部に建設し、最も壮麗な都市の郊外もまた出来上がった。陛下はこの清浄なる地区に天国の門という尊称をつけ、ジャアファルアーバード (*Ja'far-ābād*) と名づけた。」 [*Khulāṣat*, 399]

*Khulāṣat* は、新ダウラトハーナだけでなく、周辺の諸邸宅や街路を含めた王宮地区の整備が完了したことを記述している。この建設事業は 962/1555 年以前から少なくとも 3 年以上にわたる大掛かりな事業であった。

第 6 章で考察するように、968-9/1561 年にタフマースブはオスマン朝の使者を宮殿内で謁見している。カズウィーンの王宮地区の建設事業は 951/1544 年から 966/1558 年の間に順次行われていったが、オスマン朝の使者を施設で出迎えた頃には、タフマースブはすでにカズウィーンからの遠出の機会が減少していた<sup>31)</sup>。建設事業が進む過程でタフマースブの都市定住

31) 1561 年にカズウィーンの宮廷を訪れたイギリス人使節 Jenkinson は、タフマースブ 1 世が 33 から 34 年間もカズウィーンの邸宅の範囲から出ることはなかったと記述しているが [*Jenkinson*, 432-3]、年代記や他の外国人旅行記の記述の情報とは整合性が取れず、さすがに信憑性が疑われる。第 4 章も参照のこと。

への志向も強まっていったのである。

#### 4. タフマースブ 1 世の冬営と建設事業完了

イランおよび中央アジアの遊牧系イスラーム王朝の君主は、夏は郊外の夏営地に滞在し、冬に都市部に冬営するのが慣習であった。サファヴィー朝もこの習慣を基本的に保持し続けた。タフマースブの統治年は 930/1524 年から 984/1576 年までの 52 年間にわたるが、即位後の最初と 2 回目の冬の滞在地は首都のタブリーズであった（以下、表参照）。しかし、タフマースブは即位時に幼年であったために政治の実権は持たず、まもなく王朝の軍事の中核を担っていたキジルバシュ諸部族の間で内乱が勃発し、政情は不安定となった。この間、戊年/932/1526 年から寅年/936/1530 年、タフマースブは夏には各地へ遠征を行い、冬営地は一カ所に限定されないが、そのうち 3 回はすでにカズウィーンが冬営地に選ばれている<sup>32)</sup>。

卯年/937/1531 年と辰年/938/1532 年の 2 年間、再びタブリーズが冬営地となった。次の年にはタフマースブはホラーサーン地方へ遠征を行ったため、そのまま同地の中心地ヘラートで冬営している。また午年/940/1534 年のスレイマン 1 世の第 1 回アゼルバイジャン遠征に対抗するために帰還してからは、各地での転戦を続け、冬営地もその時々で選ばれ、規則性は見られない。酉年/944/1538 年からは、5 年間にわたってタブリーズで冬営が行われている。この間には夏場にアゼルバイジャン地方の北部にあるシールワーンやグルジアへの遠征が行われているため、タブ

---

32) 太陰太陽暦のトルコ暦と太陰暦のヒジュラ暦とは 1 年に約 11 日ずつズレが生じる上、トルコ暦を採用する年代記の間でもトルコ暦優先かヒジュラ暦優先かでズレや間違いが生じる [後藤 2008, 63-6 参照]。トルコ暦と西暦との間でも新年のずれがある。トルコ暦基準で冬営と夏営が記録した年代記が、最も各暦の間のズレや間違いが生じにくいいため、この章ではトルコ暦の十二支も表記する。また、本稿では付録の表も含めて *Takmilat* を基準としている。



リーズがその拠点となっていたのであろう。特筆しなければならないのは、この期間中、子年／946-7/1540年にタブリーズの王宮地区サーヒブアーバード (*Šāhib-ābād*) の庭園内に新宮殿が建設されていることである [Takmilat, 91; *Aḥsan*, 1273; Membré, 29]<sup>33)</sup>。

数年ぶりにカズウィーンでの冬営が行われた卯年／949-50/1543年は、Mazzaoui がカズウィーンへの遷都が行われたと考える年であり、辰年／951/1544は実際にカズウィーンでの王宮地区建設事業が開始された年にあたる。翌年もカズウィーンで冬営している。これ以降、タブリーズよりもカズウィーンで冬営する回数が増え、この間にカズウィーンでの建設事業が進む。しかし、この期間は弟のアルカース・ミールザーの反乱や、グルジアへの遠征、スレイマン1世の第2回アゼルバイジャン遠征など有事が続き、各地を転戦するタフマースブが連続してカズウィーンで冬営することはまれであった。*Khulāṣat* が遷都年とする卯年／962-3/1555年以降はほぼカズウィーンで冬営が行われているとはいえ、前後にタブリーズで過ごすこともあった。タフマースブのカズウィーン定住が常態化し、年代記でも冬営地について明記しなくなるのは、新ダウラトハーナへの引越が済んだ午年／965-6/1558年以降のことである。

カズウィーンでの王宮地区の建設事業が進展した950/1540年代にタフマースブは季節移動の習慣をまだ保持しており、カズウィーンはタブリーズと「統治の都」の機能を共有することになったが、いまだ恒常的な首都とまではなっていなかった。後世に執筆された年代記である *Khulāṣat* と *TAA* の記述は、歴史的な事実を反映しているとはいえないのである。建設事業の進展具合とタフマースブの冬営状況から判断すると、遷都の完了

33) サーヒブアーバードはアク・コユル朝ヤアクーブ・ベク時代に建設された王宮地区で、同名の広場に面した庭園内部にヤアクーブ・ベクがハシュト・ビビシュト（八天宮の意）宮殿が主宮殿であった。このサーヒブアーバードの広場と庭園の複合構造は、カズウィーンやイスファハーンの王宮地区の原モデルとされる [cf. Alemi 1997, 73]。タブリーズの王宮地区については、別項で検討する予定である。

年をこの年に設定した Mazzaoui や Eshraqi, 平野の考えは合理性があるといえよう。

## 5. 「統治の都」の称号の使用にみる建設事業のきっかけ

サファヴィー朝の年代記には領内の主要都市に別称がつけられることがある。この称号は最初の首都タブリーズやその後に首都となったカズウィーンやイスファハーンだけでなく、それ以外の首都機能を持った都市にも使われるようになった。また複数の都市が同時に「統治の都」と呼ばれたことも特徴である<sup>34)</sup>。多くの「統治の都」は支配者の移動ルートに組み込まれ、首都機能を獲得した段階でこの称号を冠されていることが観察される。

カズウィーンの場合、年代記に「統治の都」の称号を冠した事例が最初に登場するのは *Takmilat* の卯年／950/1543年の記述（①）である。この年は数年ぶりにカズウィーンでの冬営が行われ、Mazzaoui がカズウィーン遷都年と考える年にあたる。王宮地区建設事業が開始された、翌年の辰年／950-1/1544の記述では、*Takmilat* だけでなく *Khulāṣat* も「統治の都」を使用しており、カズウィーンが冬営の拠点に定められたことが読み取れる。それでは、この年に王宮地区の建設計画が持ち上がった特別な理由はあったのであろうか。

タフマースブは949/1543-4年の冬をカズウィーンで滞在した後に夏営

---

34) 後藤 2014 参照。なお、「統治の都」の称号の使用はサファヴィー朝の先駆王朝の時代にすでに観察される [cf. *Amīnī*, 162]。ティムール朝ヘラート政権の首都であったヘラートに対しては、同時代末期からサファヴィー朝初期に書かれた年代記 *Ḥabīb al-siyar* (『歴史の伴侶』) の 800/1400 年代後半以降の記述 [cf. *Tārīkh-i ḥabīb al-siyar*, III, 148] で多用される。サファヴィー朝領の東北部にあり、ホラーサーン遠征時を除いてシャーの長期の滞在地とはならなかったヘラートに「統治の都」の称号の使用が継続されたのは、前時代以来の伝統というだけでなく、同地が地政学的に重要な拠点都市であり、サファヴィー朝の前期において王子が派遣されたことなどが理由と推測される。

に出発した。この頃に兄弟との権力争いに敗れたムガル朝第2代フマーユーンがサファヴィー朝のもとに亡命してきた。タフマースブはフマーユーンと夏営地で会見しているが、TAAによればフマーユーンは「統治の都カズウィーンではその地の市長 (*kalāntar*) の Khwāja ‘Abd al-Ghanī Jalādātī の邸宅 *manāzil* が陛下の滞在場所となり、しばらくその邸宅で休息して過ごし」[TAA, 98] ている。サファヴィー朝ではこの後にオスマン朝やウズベクのシャイバーン朝の王族の亡命を受け入れるが、フマーユーンが亡命してきた時にはまだ支配者自身や外国の使節などの貴顕が滞在できるようなカズウィーンには施設が存在していなかったのである。タフマースブとの会見後、フマーユーンは自ら希望してタブリーズを訪問し、同地で盛大な歓迎を受ける。

「タブリーズの住民は世界のシャーの命令に従って町を飾りつけ、カイサーリーヤとバーザールを新婦が夫婦の喜びの寝室ごとく飾り立て、その壮麗なる天の皇帝を完全なる装飾によって出迎え、品をもってお仕えした。その高貴な生まれのホスロー (=フマーユーン) にサーヒブアーバード広場で、タブリーズ人たちの定番のポロ競技や弓術競技や大道芸 (*aqsām-bāzī-hā wa shūrīn-kārī-hā*) をご覧にいれ、貴き御心をお喜ばしになった。」[TAA, 100]

アク・コムンル朝時代に建設されたタブリーズのサーヒブアーバード広場は、946-7/1540年にタフマースブが新宮殿を建設する以前から、すでに公共空間として機能していた。フマーユーンが訪問した際にも、西アジアの伝統的な競技のポロ競技や大道芸が披露されるなど、市民も動員されて外国からの王族を歓迎するプログラムが整っていた。フマーユーンの宿泊先については書かれていないが、サファヴィー朝成立まもない1507年にタブリーズを訪れたイタリア人商人 Romano が、庭園の広場に面したところには回廊があり、広場で祝祭が開催される際の宴の会場や使節の宿泊

施設になっていたことを報告しており [Romano, 173-8], タフマースブの時代にも外国から来訪した貴顕を宿泊させる施設が王宮地区に備わっていたことは間違いないであろう。サファヴィー朝の先駆王朝の時代からの首都であったタブリーズと比べて、まだ一地方都市にすぎなかったカズウィーンの施設の貧弱さは明らかであった。

冬営のためのあらたな「統治の都」に選ばれた時点で、カズウィーンにはそれに相応しい王宮地区の整備が必要になる。フマーユーンの訪問は、そのための基盤整備が計画されるきっかけになったのではないか。

## 6. 統治の都の施設整備

### 6-1. チェヘル・ソトゥーン宮殿

現在サファヴィー朝時代の建築物はカズウィーンにはほとんど残っておらず、王宮地区の施設で現存するものは広場から庭園への入口アリ・カブ門とチェヘル・ソトゥーン宮殿 (*Īwān-i Chihil-sutūn*, 四十柱宮殿) のみである (地図参照)。第1章で確認したように、王宮地区が完成した時点でカズウィーンには新旧2つのダウラトハーナがあったが、旧ダウラトハーナがいつ、どこに建設されたものなのか、その後になくなったのかについては年代記には説明がない。チェヘル・ソトゥーン宮殿はイスマーイール2世時代からノウルーズや謁見などの宮廷行事の開催場所として利用される、ダウラトハーナよりも重要な施設になる<sup>35)</sup>。しかしながら王宮地区の建設期間中にその名は登場せず、いつ建設されたのかについても説明されない。タフマースブの同時代年代記ではそもそもチェヘル・ソトゥーン宮殿という名称は使われていない。チェヘル・ソトゥーン宮殿の名前を最初に使用した年代記は、唯一旧ダウラトハーナとチェヘル・ソトゥーン宮殿の両方の名を出す *Khulāṣat* で、新ダウラトハーナが完成したときに、「チ

---

35) Kleiss 1976; Kleiss 1990; Szuppe 1996, 161-3; 後藤 2004; 後藤 2005 を参照。

ェヘル・ソトゥーン宮殿とダウラトハーナとその他の建物の碑文の揮毫のために」[*Khulāṣat*, 401] 書家 Usutādī Maulānā Mālik Dailamī Khaṭṭāt が招喚されたことを記している。情報の少なさのためか、遷都年を論じてきた研究者も、旧ダウラトハーナとチェヘル・ソトゥーン宮殿の関係について問題にしてこなかった<sup>36)</sup>。

*Khulāṣat* の 951/1544 年末の記述 (②-b) によれば、イーワーンなどの諸施設は庭園の真中に設計された。また、*Jawāhir* の記述 (③) にあるように、すでに 955/1548 年までには庭園内には何らかの宮殿がすでに建てられていたはずである。新ダウラトハーナは馬の広場に接しており [ *Khulāṣat*, 759-60; *Dauḥat*, 113 ], 庭園全体からみれば南端に位置する<sup>37)</sup>。庭園内の最も重要な施設となるべき王宮が庭園の中心に建設されなかったのは、庭園の中心部にすでに建物があったからであろう。

*Takmilat* の作者‘Abdi Beg Shīrāzī は、カズウィーンの王宮地区を賛美する数々の詩を残していて、王宮地区の諸施設についての貴重な情報を提供する。これら諸施設は年代記とは異なった名称がつけられ、その位置関係を明らかにするような情報も限られるが、*Raudāt al-ṣafā* (『清浄園』) ではチェヘル・ソトゥーン宮殿はサアーダトアーバード庭園の真ん中、2つの通りの交点に位置していたことを詠んでいる<sup>38)</sup>。チェヘル・ソトゥーン

36) Szuppe は、白羊朝スルタン・ヤアクーブ時代にベネチア使節が謁見した建物 が旧ダウラトハーナである可能性を脚註で示唆するのみである [Szuppe 1996, 158, 159]。平野はタフマースブの回想録 (938/1532 年の記事) にあられるダウラトハーナを 962/1555 年に彼が宿泊した旧ダウラトハーナと考える [平野 1997, 45-46]。しかし平野も推察する通り、専用に建設された建物でなくとも、王族が滞在したり、執務をする邸宅がダウラトハーナと呼ばれることはしばしばあり [cf. *Khulāṣat*, 741, 797]、このダウラトハーナはサアーダトアーバード庭園内のダウラトハーナとは無関係であろう。

37) 新ダウラトハーナは現存しないが、広場と庭園の位置関係は 1684 年にサファヴィー朝宮廷を訪れた Kaempfer の残したスケッチ (Kaempfer, 75 v-76 r) で確認することができる [Cf. Alemi 1997, 85]。

38) Szuppe 1996, 162. Szuppe の典拠は‘Abdi Beg Shīrāzī の詩作集 *Raudāt al-ṣafā* [RS, 36, 38-9] だが、筆者は未見。なお、この詩中ではチェヘル・ソトゥーン宮殿は、*Eyvān-e Homāyūn* もしくは *Orosi (Oroši) Xāna* と呼ばれる。*Orosi* ♂

宮殿が新ダウラトハーナと同時に建設されたのであれば、新ダウラトハーナを庭園の中心部に建設するのが合理的と考えられる。‘Abdi Beg Shīrāzīの別の詩集 *Dauḥat al-Azhār* (『花々の樹』) では、チェヘル・ソトゥーン宮殿は北のイーワーン (*Īwān-i Shumālī*) と呼ばれる<sup>39)</sup>。宮殿の周辺にはそれぞれ東側に14、西側に9の貴顕の庭園が造営され、そのうち西の庭園のひとつにタフマースブの弟バフラーム・ミールザの庭園 (*Rauḍa-i Bahrām Mīrā*) が挙げられている [*Dauḥat*, 50]<sup>40)</sup>。同王子は957/1549年に死亡しているので、チェヘル・ソトゥーン宮殿が新ダウラトハーナの着工よりも前から存在していたことの裏付けとなる。

旧ダウラトハーナとチェヘル・ソトゥーン宮殿との直接の関わりを示す史料はない。旧ダウラトハーナは、新ダウラトハーナが完成した翌年、オスマン朝の亡命王子バヤズイトの宿泊施設として使用され [*Jawāhir*, 217; *Khulāṣat*, 406]、以後その名は登場しなくなる。さらにその2年後の968/1561年 (および970-1/1563年)、外国からの使節を謁見する会場となった

---

ㄨ (「ロシア」) はある種の多色の装飾様式に由来する [Szuppe 1996, 161, 163]。なお、*Dauḥat* では、吉兆のディーワーンハーナ (政庁の意) の庭園 (*bāgh-i dīwān-khāna-i humāyūn*) の内部の北と東の2つのイーワーンのことが詩に詠まれる。ディーワーンハーナの庭園はサアダトアーバード庭園のことであり [Szuppe 1996, 160]、北のイーワーンがチェヘル・ソトゥーン宮殿であるので、東のイーワーンはダウラトハーナのことと判断される。これは、ダウラトハーナが南北に伸びる通り *khiyābān* の東側に位置しているからと推察される。

39) 新ダウラトハーナや広場の方からみて北に位置することからついた名称であろう。その内部の壁画と描写と *Khulāṣat* の作者 Qāzī Ahmad Qumī が執筆した芸術家論 *Gulistān-i hunar* (『芸術の花園』) での描写が一致することから、北のイーワーンをチェヘル・ソトゥーン宮殿と同定することができる [*Dauḥat*, 42-6, 97-8; *Gulistān-i hunar*; 138; *TAA*, 174; Szuppe 1996, 161-2]。ダウラトハーナが建設された頃は、すでにタフマースブが芸術への熱意を失っていた時代であるが、諸芸術家の手によって宮殿が豪華に装飾されたことは、彼がまだ芸術家の支援を続けていたことを示す [Eshraqi 1996, 111]。Alemi は北のイーワーンをダウラトハーナと考えているが、これは *Gulistān* を確認しなかったことによる誤りである [Alemi 2007, 118]。なお Alemi は、Eshraqi 2536 や Wirth 1997 も参照していない。

40) Szuppe はそれら庭園の位置関係の解明を試みている [Szuppe 1996, 166-8; 平野 1997, 45]。

のはチェヘル・ソトゥーン宮殿である [Khuḷāṣat, 417-8; 437]<sup>41)</sup>。あくまでも断片的な情報をつなぎあわせた推論に過ぎないが、庭園の中心部に初期に建設され、「ユースフとズライハー」などの物語の場面を描いた豪華な壁画や、若き頃に芸術に傾倒したタフマースブ自身の筆による壁画で装飾されたチェヘル・ソトゥーン宮殿が、もともとシャーとその家族が住まう私的空間であるダウラトハーナであったとしても不自然ではない。シャーの定住に伴ってその邸宅が新ダウラトハーナに移された際、旧ダウラトハーナには書家に碑文などの改修が施された上で、宮廷行事を開催するための施設という新たな役割が付与され、それに相応しいチェヘル・ソトゥーンという新たな名称がつけられたと推察される<sup>42)</sup>。

いずれにしても、タフマースブ時代の公式の宮廷行事の開催地としてのチェヘル・ソトゥーン宮殿の機能は、使節の謁見の会場程度に限られており、即位式やノウルーズの祝祭などの多様な機能が年代記などで確認されるようになるのはイスマーイール2世時代以降のことである。このような公的機能の発展は、広場についても観察することができる。

## 6-2. 2つの広場

サファヴィー朝の「統治の都」の王宮地区の機能を考える上で、宮殿を内包する庭園とともに欠かせないのが広場の存在である。Szuppe はサファヴィー朝時代の広場の機能として、軍事、王室行事（謁見、レセプション、祝祭、処刑）、商業活動の3つを挙げる [Szuppe 1996, 172-4]。しか

41) タフマースブ時代に書かれた *Aḥsan al-Tawārīkh* によれば、会場は謁見の間 (*bārgāh-i humāyūn ki ghairat-afzā-yi tāram-i gardūn*) [*Aḥsan*, 1420-1]。

42) 新ダウラトハーナの完成前の962-3/1555年にタフマースブの宿泊施設となった「Qāḍī Jahān al-Ḥasanī の邸宅の一部であった旧ダウラトハーナ」(④-a)は何かという問題が残される。Qāḍī Jahān al-Ḥasanī はタフマースブの宰相で、もともと庭園のために購入された土地所有者の父でもあり、タフマースブがカズウィーンで冬営しなかった不在期間に一族が旧ダウラトハーナに居住し、何らかのかたちで庭園の管理、建設活動の監督に関与していた可能性は十分にある。

し、Szuppe も指摘するように、16 世紀の叙述史料には広場についての記述は少ない。

1636 年にホルシュタイン使節としてペルシアに赴いた Olearius は、カズウィーンに2つの大きな広場があったことを記している [Olearius, 482]。そのうち Olearius も名前を挙げている、サアーダトアーバード庭園に面した広場は馬の広場である。966/1559 年の夏にタフマースブは「吉兆のダウラトハーナの幸運の小庭園と馬の広場 (*Sāhat-i Maidān-i Asb*)」が「世界の薔薇園の嫉妬を駆り立てる」ほど素晴らしかったので、ノウルーズが過ぎてもカズウィーンから夏営に出立しなかった [Khulāsat, 401]。これが、馬の広場に関する最初の記述である。もちろん *Khulāsat* は後年の作であるが、‘Abdī Beg Shīrāzī の詩作から遅くとも 1570 年代までにサアーダトアーバード庭園と接する広場が馬の広場と呼ばれていたことは確認できる [Dauhat, 113]。

ペルシア語で広場を意味するメイダーンは、もともと馬場や競馬場を意味する。イスラーム以前からイランやイラクの町では郊外に広場があり、競馬やポロ競技が開催され、それ以外の日には市場となった<sup>43)</sup>。遊牧系の王朝にとって馬は重要な移動や軍事活動の手段であり、練兵場を兼ねた広場は必要不可欠な施設であった。サアーダトアーバード庭園の建設が始まった時点で設置された大門 (②-b) が、そのまま馬の広場に面したアリ・カブ‘Ālī-Qāpū と呼ばれる大門 [*Khulāsat*, 676, 692; Szuppe, 160] になったのかどうかは不明だが、庭園の正門の前が馬場となり、それが広場にまで発展することは自然なことと思われる。馬の広場という名称は、広場が元来もっていた機能とその発展の歴史を示唆するものといえる [Szuppe 1996, 171-2]。

967/1559-60 年の冬のオスマン朝のバヤズイト王子の亡命の際に、彼は広場で出迎えを受けた<sup>44)</sup>。*Khulāsat* によれば、「現在その一部は市場や隊

43) Gaube, 1979, 76-78; 羽田 1987, 187; Alemi 1991, 100 などを参照。

44) バヤズイトの受け入れと祝宴については、年代記によって日付、経緯、広場が



商宿やハンマームになっているサアーダト広場で出迎えの会見が行われ」、盛大な祝宴が開催された後に、バヤズイトは旧ダウラトハーナに案内された [Khulāṣat, 406]。この広場については *Sharaf-nama* (『シャラフの書』) および *Jawāhir* は次のように説明している。

「キジルバシュの大物たちアーヤーンたちのほとんどが出迎えに行き、王の旧ダウラトハーナにお連れし (*daulat-khāna-i qadīm-i shāhī*)、3日後、王の建造物のひとつであるカズウィーンの新広場 (*maidān-i jadīd-i Qazwīn*) に祝祭の場を用意し、大掛かりな宴を催した。」 [Bidlisi, II, 214]

「陛下はまだ荒地 (*ṣahrā*) だった新広場 (*maidān-i mujaddid*) に天幕を張り、皇帝の会話をご用意された。」 [Jawāhir, 217]

*Sharaf-nama* の筆者の Sharaf al-Dīn Bidlīsī はこの当時サファヴィー朝宮廷に仕えていたクルド人で、同時代史料として価値が高い。「王の建造物のひとつ」とあることから、これがサアーダト広場であることは間違いないと思われるが、「新広場」という表現から、バヤズイトが出迎えを受け

ㄨ の名称にそれぞれ微妙な違いがある。*Takmilat* によれば、会見は Ja‘afar-ābād 庭園で行われ、バヤズイトは旧ダウラトハーナに滞在する [Takmilat, 116]。*Ahsan* によれば、バヤズイトはカズウィーンの広場に到着、数日後に広場で盛大な宴が開催される [Ahsan, 1415]。*Jawāhir* では、まだ荒地だった新広場に天幕が張られ、バヤズイトはそこで出迎えを受けた後に旧ダウラトハーナに案内される [Jawāhir, 217]。*TAA* では、サアーダトアーバード広場で会見、祝宴が行われる [TAA, 102]。ここでは、考察対象を馬の広場の完成とその機能に限るため、年代記間の異同の考察は行わない。なお *TAA* には、サアーダト広場という名称も使われる [TAA, 102, 208]。*Szuppe* はサアーダトアーバード広場を馬の広場の別称、サアーダト広場を馬の広場とは別の広場と判断している [Szuppe 1996, 171-2]。しかし、Alemi や Wirth が Amirshahi の博士論文 (筆者未見) に基づいて明らかにしているように、周辺にバーザールが整備されたサアーダトアーバード広場とサアーダト広場が同じものであり、馬の広場とは別の広場である。サアーダトアーバード広場は、*Szuppe* の地図におけるシャー・モスクの位置にあったことが *Kaempfer* のスケッチで確認できる [Kaempfer, 75 v-76 r; Wirth, 470, 478-9. Cf. Alemi 2007, 114-5]。

たこの広場は、新ダウラトハーナの完成よりも遅れて完成したことが確認される。そして、主に軍事や政治的機能を担うようになった馬の広場に対して、主に経済的機能を担ったサアーダト広場は *Khulāṣat* も述べるように、まだ市場などの経済施設は備えておらず、この当時はまだ荒地地で完成とはほど遠かったのである。

タフマースブが「統治の都」の整備のため市の郊外に土地を購入して王宮地区の建設を開始したとき、設計計画にあったのは庭園と宮殿であり、そこに広場の設計は含まれなかった。その後も広場についての言及はみられなかった。いいかえると、すでにタブリーズの王宮地区で広場の公的機能や経済的機能に親しんでいたにもかかわらず、カズウィーン建設事業の時には庭園の建設が最優先であり、広場は必要不可欠な施設ではなかった。アッバース1世がイスファハーンの新市街を建設した時には、彼は既存の広場をそのまま利用し、広場に面して王宮地区を整備した。アッバース1世にとっては、広場は王宮地区の構成要素に欠くことのできない中核施設となっていた。タフマースブ時代の「統治の都」への考え方からの変化を、ここにうかがうことができよう。

庭園と広場からなるサアーダトアーバード王宮地区の複合施設が完成すると、タフマースブはさらに周辺施設の充実をはかった。974/1567年にオスマン朝の使節が来訪したとき、その出迎えのためにサアーダト広場にあらたに建てられたバーザールに装飾が施された [*Khulāṣat*, 460]。*Khulāṣat* が執筆完了した999/1591年までには、バーザール、隊商宿、ハンマームが同広場に建設されている [*Khulāṣat*, 406; *TAA*, 123]。タフマースブ死亡の際に馬の広場は騒乱の舞台となった [*Jawāhir*, 236; *Khulāṣat*, 653]。スルタン・ムハンマド・フダーバンダ時代の1580年代には、馬の広場に面した大門にはターラール (*tālār-i sar-i dargāh-i Maidān-i Asb*) の設置が確認される。遠征軍の帰還などに際し、シャーや王族はターラールに出て、これを出迎えた [*Khulāṣat*, 676, 692]。

タフマースブがカズウィーンに定住するようになってようやく、時間を

かけてサアーダトアーバードの広場は、政治、軍事、経済の機能を有する公共空間としての整備が進められていったのである。

## お わ り に

サファヴィー朝のシャーが冬営するあらたな「統治の都」としてのカズウィーンの王宮地区の建築活動は、タフマースプ1世が遠征で各地を移動する間、10年以上かけて推進された事業であった。

950/1543年に数年ぶりにカズウィーンで冬営を行った翌年、ムガル朝のフマーユーンの来訪をきっかけに、カズウィーンに「統治の都」に相応しい施設を備えるためにサアーダトアーバード庭園の建設が着手された。この建設活動は951/1544-5年の冬から966/1558年までの約13年間にわたって行われた。庭園内部の建物については、まず953/1546-7年に恐らく旧ダウラトハーナと思われる宮殿の着工が行われ、2年後の955/1548年に庭園の整備とともに一旦竣工した。960/1550年代の前半にあらたなダウラトハーナが着工され、966/1558年に周辺の支配者層用の居住区ジャアファルアーバードとともにサアーダトアーバードの王宮地区が完成した。タフマースプ1世がカズウィーンに定住するようになって以降、庭園に接する広場が整備され、さらに周辺の経済施設の充実がはかられた。広場が多機能の公共空間へと発展を遂げる一方、チェヘル・ソトゥーン宮殿は謁見などの宮廷儀礼の開催となった。長い時間をかけてサファヴィー朝の庭園＝広場の複合構造をもつ王宮地区は、「統治の都」の政治・軍事・経済の中心としての容貌を獲得していった。

サファヴィー朝の最初の首都タブリーズの王宮地区サーヒブアーバードが前王朝時代の王宮地区を継承・発展させたものであったのに対して、カズウィーンのサアーダトアーバードは一から着手されたものであったため、同朝の初期の「統治の都」の哲学とその変遷を明確にする。市の郊外に最初に庭園の建設が計画されたことは、遊牧民の庭園文化の継承を示

サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業

す。シャーが冬を過ごすあらたな「統治の都」には、何よりも自然豊かな居住空間の快適さが望まれたのである。タフマースプ1世がカズウィーンを「首都」として定住すると、王宮地区は広場を中心に政治や軍事、さらには経済の機能を充実させていった。また公共空間である2つの広場や公的儀礼の専用施設としてのチェヘル・ソトゥーン宮殿は、都市においてサファヴィー朝の王権を広く可視化する役割も担うようになった。このようなタフマースプ1世の王宮地区建設の思想は、アッパース1世のイスファハーンの建設事業に受け継がれていくことになる。

#### 参考文献

##### 史料

- ‘Abdī Beg Shīrāzī. 1369. *Takmilat al-akhbār*, ed. ‘A. Nawā’ī, Tehran.
- . 1974. *Dawhat al-azhār*, eds. A. G. Regimov & A. Minai, Moscow.
- Būdāq Munshī Qazwīnī. 2000. *Jawāhir al-akhbār: Bahsh-i tārikh-i Irān az Qarā Qūyunlū tā sāl-i 984 H. Q.*, ed. M. Bahrām-nizād Tehran.
- Faḡlullāh b. Rūzbihān Khunjī-Isfahānī. 1992. *Tārikh-i ‘ālam-ārā-yi Amīnī*, ed. John E. Woods, Royal Asiatic Society, London.
- Ḥasan Beg Rūmlū. 1357. *Aḥsan al-tawārikh*, ed. ‘A. Nawā’ī, Tehran.
- Iskandar Beg Turkmān Munshī. 1350. *Tārikh-i ‘ālam-ārā-yi ‘Abbāsī*, 2 vols., ed. I. Afšār, Tehran.
- . 1978. *History of Shah ‘Abbas*, 3 vols., tr. R. M. Savory, Westview Press, Boulder.
- Khwādamīr. 1333. *Tārikh-i ḥabīb al-siyar fī aḥbar afrād al-bashar*, 4 vols., ed. J. Humā’ī, Tehran.
- Qāzī Aḥmad Qumī. 1980. *Khulāṣat al-tawārikh*, ed. E. Ešrāqī, II, Tehran, 1980-83.
- . 1964. *Die Chronik Ḥulāṣat at-tawārikh des Qāzī Aḥmad Qumī: Der Abschnitt über Shah ‘Abbās I*, ed. & tr. H. Müller, Wiesbaden.
- . 1366. *Gulistān-i Hunar*, A. S. Khwānsārī, Tehran.
- Sharaf Khān Bidlīsī. 1860. *Sharaf-nāma*, ed. V. Véliamīnof-Zernov, II, St. Petersburg, 1860-2.
- Jenkinson, Anthony. 1885. *Early voyages and travels to Russia and Persia*, vol.1, Hakluyt Society (repr. New York), 72.
- Kaempfer, Engelbert. 1684. British Library Manuscript, Sloane 2923.
- Membré, Michaele 1999. *Mission to the Load Sophy of Persia (1539-1542)*, tr. & ed. A.

H. Morton, London.

Olearius, Adam. 1656. *Vermehrte Neue Beschreibung Der Muscovitischen und Persischen Reyse*, Schleswig (repr. Frankfurt am Main).

Romano, Francesco. 1873. "Travels of a Merchant in Persia", in *Travels to Tana and Persia. A narrative of Italian travels in Persia*, tr. C. Grey, Hakluyt Society (repr. New York), 49, 141-207.

シャルダン 1993 『ペルシア紀行 (17・18世紀大旅行記叢書6)』岩波書店

### 参考文献

Alemi, Mahvash. 1991. "Urban Spaces as the scene for the ceremonies and pastimes of the Safavid court", *Enviromental Desing : Journal of the Islamic Environmental Design Research Centre* i, 98-107.

———. 1997. "The Royal Gardens of the Safavid Period : Types and Models", in ed. A. Petruccioli, *Gardens in the Time of the Great Muslim Empires : Theory and Design*, suppl. to *Muqarnas* 7, Leiden, 72-96.

———. 2007. "Princely Safavid Gardens : Stage for Rituals of Imperial Display and Political legitimacy," in ed. M. Conan, *Middle East Garden Traditions : Unity and Diversity*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.

Babaie, Sussan 2003. "Building on the Past : the Shaping of Safavid Architecture, 1501-76", in eds. Jon Thompson and Sheila R. Canby *Hunt for Paradise : Court Arts of Safavid Iran 1501-1576*, Skira, Milano, 27-47.

———. 2008. *Isfahan and its Palaces : Stetacraft, Shi'ism and the Architecture of Conviviality in Early Modern Iran*, Edinburgh University Press, Edinburgh.

———. 2015. "Sacred Sites of Kingship ; The Maydan and Mapping the Spatial-Spiritual Visual of the Empire in Safavid Iran", in eds. Jon Thompson and Sheila R. Canby, *Persian Kingship and Architecture : Strategies of Power in Iran from the Achaemenids to the Pahlavis*, Tauris, London, 175-218.

Blake, P. Stephen. 2003. "Shah 'Abbās and the Transfer of the Safavid Capital from Qazvin to Isfahan", in ed. Andrew J. Newman, *Society and Culture in the early Modern Middle East : Studies on Iran in the Safavid Period*, Brill, Leiden-Boston, 145-164.

Braun, Hellmut. 1969. "Trān under the Şafavids and in the 18th century", in tr. & ed. F. R. C. Bagley, *The Muslim World : A Historical Survey, Part III, The last Great Muslim Empires*, Brill, Leiden, 181-218.

Eshraqī, Ehsān. 2536. "Naqqāshī-hā-yi kākh-i Chihilsutūn-i Qazwīn wa kāh-hā-yi dīghar-i Şafawī : az khilāl-i manzūma-yi 'Abdī Btk Shīrāzī", in *Hunar wa Mardum*, 182, 2-9.

- Eshraqi, Ehsan. 1996. "Le Dar al-Saltana de Qazvin, deuxième capital des Safavides", in ed. Charles Melville, *Safavid Persia*, I. B. Tauris, London and New York, 105-116.
- Gronke, Monika. 1992. "The Persian Court between Palace and Tent: From Timur to 'Abbas I." *Timurid Art and Culture: Iran and Central Asia in the Fifteenth Century* (L. Golombek & M. Subtelny eds.), 18-22, Leiden & N.Y. & Köln, Brill.
- Goto, Yukako. 2016. "Development of Transport and Growth of Cultural Homogenization in the later Safavid Period", in ed. Kondo Nobuaki, *Mapping Safavid Iran*, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo, 99-126.
- Kleiss, Wolfram. 1976. "Der safavidischen Pavillon in Qazvīn", in *Archaeologische Mitteilungen Irans, Neue Serie*, 9, 253-261.
- Kleiss, Wolfram. 1990. "Čehel Sotūn", in *Encyclopaedia Iranica*, V, 116-117.
- Lambton, Ann K. S. 1990. "Qazwīn", in *EI* 2, IV.
- Lockhard, Laurence. 1960. *Persian Cities*, London.
- Maazaoui, Michel M. 1975. "From Tabriz to Qazvin to Isfahan: Three phases of Safavid history", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, suppl. 3/i, 514-522.
- Minorsky, Vladimir. 2000. "Tabrīz", *EI* 2, X, 41-50.
- Morgan, David. 1988. *Medieval Persia, 1040-1797*, Routledge, London & N.Y.
- Newman, Andrew J. 2006. *Safavid Iran: Rebirth of a Persian Empire*, Tauris, London & N.Y.
- Quinn, Sholeh A. 2000. *Historical Writing During the Reign of Shah 'Abbas: Ideology, Imitation and Legitimacy in Safavid Chronicles*, The University of Utah Press, Salt Lake City.
- Roemer, Hans R. 1986. "The Safavid Periods", in P. Jackson & L. Lockhard (eds.), *The Cambridge History of Iran 6: The Timurid and Safavid Periods*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Röhrborn, Klaus-Michael. 1966. *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert*, Berlin, Walter de Gruyter & Co..
- Savory, Roger. 1980. *Iran under the Safavids*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Sutūda, Ḥusain-ʿAlī. 1969. "Tārīkhcha-yi Qazwīn", *Barrashī-hā-yi Tārīkhī*, 4: 5-6. 165-210.
- Szuppe, Maria. 1996. "Palais et jardin: le complexe royal des premiers Safavides à Qazvin, milieu XVI-debut XVII siècles", *Res Orientales*, 143-177.
- Wilber, Donald N. 1962. *Persian Gardens and Garden Pavilions*, Tokyo.
- Wirth, Eugen 1997. "Qazvin - Safavidische Stadtplanung und Qadjarischer Bazar", *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan*, 29, 461-504.

- 後藤裕加子 2004 「サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』61, 20-46.
- 後藤裕加子 2005 「宮廷儀礼としてのノウルーズ——16世紀後半サファヴィー朝宮廷とムガル宮廷の比較から——」『人文論究（関西学院大学文学部）』55: 2, 94-110.
- 後藤裕加子 2008 「サファヴィー朝年代記とトルコ暦（十二支）の導入」『東洋史研究』66: 4, 50-82.
- 後藤裕加子 2014 「サファヴィー朝後期のシャーの移動と「統治の都」」『人文論究（関西学院大学文学部）』64: 2, 2-57.
- 羽田正 1987 「メイダーンとバグ：シャー・アッバースの都市計画再考」『橋女子大学研究紀要』14, 336-318.
- 羽田正 1990 「「牧地都市」と「墓廟都市」：東方イスラーム世界における遊牧政權と都市建設」『東洋史研究』49: 1, 1-29.
- 羽田正 1996 『シャルダン 『イスファハーン誌』研究：17世紀イスラーム圏都市の肖像』東京大学出版会
- 平野豊 1997 「ガズヴィーン遷都の年代比定——16世紀サファヴィー朝文化史再編の観点から」『イスラーム世界』48, 37-53.
- 平野豊 1999 「ガズヴィーン遷都要因に関する予備的考察——スレイマンⅠ世の両イラク遠征がもたらした影響を中心に」『明大アジア史論集』4, 1-22.
- 平野豊 2000 「シャー・タフマースプ一世治下のサファヴィー朝宮廷とゴム、エスファハーン両都市との戦時協力体制——ハーネ・クーチの都市移送に関する事例研究（1）」『駿台史学』109, 1-34.

# サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業

サファヴィー朝時代のカズウィーン

